

- 問一 自分たちの生活をじゃまする茜たちをうとましく思う気持ち。
- 問二 うんざりするほど退屈で、みじめな田舎暮らしを耐えがたく思い、以前住んでいた都会の街で楽しく、生き生きとした日々を送りたいという気持ち。
- 問三 日が暮れると、昼間はすばらしいと思えた家出が、自分を不安にするだけのつまらない試みになってしまったということ。
- 問四 不可能だと思っていた家出が成功し、満足した思いでながめた海が、自分にもっといろいろなことができるという自信を与えてくれたから。
- 問一 1 要求 2 定刻 3 済〔む〕 4 宣伝
- 問二 プライベートの時間など、ほとんどなく、すべてがつねに他人との関わりの中にあって、毎日が喜怒哀楽に満ちていた。
- 問三 日本は人との関わりで生じるストレスを注意深く取り除き、感情の起伏を極端に抑制する社会であることに改めて気づいたということ。
- 問四 自分のうちから自然にわきおこってきたものではなく、外部の力によって意図的に操作され、強制的に喚起されたものだから。

出典は、荻原浩「空は今日もスカイ」。

問一 小学校三年生の「茜」は母親と一緒に、おじさんとおばさんの家に居候しています（前書き）。はじめのうちは「ずっといいんだよ」と歓迎されていましたが、十日も経つと風向きは一変し、「いつまで居座る気なのか」と迷惑がられるようになります。特におばさんは、食事時になると「きちんと食費をもらってよね」などと聞こえよがしに嫌みを言うほど、あからさまに嫌がっています。おじさん、おばさんにとって茜たち親子は、とつぜん転がりこんできて、そのまま図々しく居座り続ける厄介者です。「たんぼ」はおじさん、おばさんにとって大切なもの、すなわち、平和な生活そのものであり、おじさん、おばさんはそれを荒らす「カラス」（茜たち）を迷惑がって（うとましく思って）います。

〈解答例〉

⑤ 〈自分たちの生活をじゃまする茜たちを〉④ 〈うとましく思う気持ち〉。

問二 おじさん、おばさんから迷惑がられていますが、茜は茜で何も「来たくて、このビレッジに来たわけじゃない」と反発する思いを抱えています。「母ちゃんといっしょに〜ぶかぶかした部屋」も「窓を開けると〜鶏小屋の臭い」も「どこを見てもイネしかない風景」も、この「ビレッジ生活」の何もかもが嫌で嫌で仕方ありません。ここに来る前、茜たちは「大きな街」で暮らしていました。小学校は「一学年が二クラスしかない」ような小さな学校ではなかったし、「夏休みになって遊ぶ相手がいない」こともありません。快適な「ライフ」に戻りたい。「生活」と「ライフ」は同じ意味ですが、茜はつまらない田舎暮らしを「生活」、（今は失ってしまった）理想的な都会暮らしを「ライフ」と使い分けています。

〈解答例〉

⑤ 〈うんざりするほど退屈で、みじめな田舎暮らしを耐えがたく思い〉、⑤ 〈以前住んでいた都会の街で楽しく、生き生きとした日々を送りたいという気持ち〉。

問三 勝手な大人たちにうんざりした茜は「ホーム・ゴー」（家出）を決行します。「海に着いたら、海を見る」ことを目標に、茜は同行者（フォレスト）とともに、何とか海にたどりつきます。「何度も何度も波を〜砂浜に戻った」り、「傘とゴミ袋で魚とりをした」り、ひとしきり楽しんでいましたが、日が暮れると、にわかに「現実という名前〜照らし出し」ます。夜になったのです。果敢に「家出」にチャレンジしたとはいえ、茜は小学校3年生。「一人でどこかに泊まるなんてできっこない」。母親に「お説教を食らう」ことが分かっている、でも、「やっぱり帰るしか」ありません。明るいうちは楽しかった「家出」は、日が暮れたとたん「夜を過ごさなければならない」という重い課題を突きつけ、茜を不安にさせます。色とりどり、華やかだった「夢の世界」は、「現実の世界」となって、すべての色を失います。

— <解答例> —

⑤ <日が暮れると、昼間はすばらしいと思えた家出が>、⑤ <自分を不安にするだけのつまらない試みになってしまったということ>。

問四 夜になり、家出をあきらめて帰ろうと思っていた茜でしたが、「ビッグマン」のおかげで、夜を明かせることになりました。「海に着いたら、海を見るのだ」ということを目標に決行した家出を成功させた茜は、満足して夜の海を眺めます。「夕方には怖くなって～わかっていた」のに、「帰らずにここにいる」ことに「興奮していた」茜は「ぜんぜん怖く」ありません。「初めての家出」をして「初めてひとりで見る海」は「茜の体に新しい何かを注ぎこんでくれ」ました。「月の真下の海には、月の細い帯」が「まるで一本の道みたいに」伸びています。家出を成功させた茜は「想像の中」で「その光の道を歩い」ています。「明日はまた新しい道を歩いてみよう」「もっと遠くへ行ってみよう」。「海」は「冒険」の末にたどりついた茜を祝福し、自分はもっといろいろなことができるという自信を与えています。

— <解答例> —

③ <不可能だと思っていた家出が成功し、満足した思いでながめた>、④ <海が自分にもっといろいろなことができるという自信を与えてくれたから>。

二 出典は、松村圭一郎「うしろめたさの人類学」。

問二「あまり感情的にならない人間」であり、「人とぶつかることも～冷めた少年だった」筆者の性格は、エチオピア滞在中に激変します。筆者の奮闘ぶりは「なにをやるにしても～表情を浮かべていた気がする」までの部分に描かれています。筆者が「つねにいろんな表情を浮かべて」いたのは、「腹の底から笑ったり～喜怒哀楽に満ちた時間」を過ごしていたからです。「なにをやるにしても、物事がすんなり運ばない」というお国ぶりと「言葉の通じにくさ」がコミュニケーションを阻害します。「生活のすべてが～関わりのなか」にあり、「プライベートな時間など、ほとんどない」国で、筆者は「感情的にならない」などと暢気なことを言っていられないほど、刺激に満ちた濃密な時間を過ごしていました。

— <解答例> —

⑤ <プライベートの時間など、ほとんどなく、すべてがつねに他人との関わりのなかであって>、⑤ <毎日が喜怒哀楽に満ちていた>。

問三 帰国した筆者は「人との関わりのなかで～システムがつくられて」いる日本という国の流儀に「逆カルチャーショック」を受けます。筆者は日本人ですから、「つねに心に波風が立たず～保たれている」「洗練された仕組みの数々」は当たり前であって、特に意識するものではありません。ところがエチオピアで本音むき出しのぶつかり合いを経験した筆者の目に、「すべてがすんなり進んで」「なんの不自由も、憤りや戸惑いも感じる必要のない」社会は奇異に映ります。人としてどちらが自然であるかは言うまでもありません。筆者は自分が「人とぶつかることもそれほどなく」「あまり感情的にならない人間」でいられたのは、日本という国の特異性によるものだったことに気がつきます。

— <解答例> —

⑤ <日本は人との関わりで生じるストレスを注意深く取り除き>、⑤ <感情の起伏を極端に抑制する社会であることに改めて気づいたということ>。

問四 日本の生活の中で「感情」が生じるケースとして、「CMによってかきたてられる物欲」と「お笑い番組を観ながら浮かぶ『笑い』」が挙げられています。ただ、これらは「『感情』と呼ぶにはほど遠い」、「薄っぺらで～軽いもの」です。人は本来「多くの感情」を持っているはずなのに、その中から「特定の感情／欲求のみが喚起され」、他の多くの感情は「抑制されて」いるのが日本社会の実態です。筆者は自分の感情が誰かによって「意図的に操作されている」ことに違和感を覚えています。

— <解答例> —

⑥ <自分のうちから自然にわきおこってきたものではなく>、⑥ <外部の力によって意図的に操作され、強制的に喚起されたものだから>。